

福音主義からみた東方正教会

——キリスト教受容千年祭を迎えたロシアをめぐって——

安村 仁志^{ひとし}

はじめに

一九八八年はロシアがビザンツ帝国からギリシア正教を国教として受容して千年目にあたり、ロシア正教会だけでなくギリシア正教会全体にとっても一つの意味深い年となっている。ロシアのキリスト教受容が九八八年であるという点については議論があるが、ロシア正教会では九八八年とみなされ、先頃記念祭が盛大に行われて世界の注目を集めた^①。モスクワ総主教庁発行の月刊誌『モスクワ総主教管区ジャーナル』にも数年来記念論文や関連記事が掲載されている。この千年のうち二五〇年はモンゴルの支配下であり、最近の七〇年余も史上初の社会主義政権という教会にとって苦難の状況下に置かれている。社会主義社会でのロシア正教会の存在形態についてはさまざまな見方がある^②。しかし千年にわたる歴史をもって今日を迎えることには一定の意味がある。国教として導入した宗教が東方のキリスト教であったため、ロシアは西方教会に属する西ヨーロッパから切り離された。また日本とキリスト教の関係に

おいても、日本への宣教が主として欧米の西方教会からだったため、ロシアは縁遠いものとならざるを得なかった。ロシアからの宣教もニコライ大主教によってなされ、一定の成果を挙げたものの^③、日露戦争、ロシア革命により打撃を受け、十分に浸透したとは言えないのが現状である。

ロシア正教会は確かに十五世紀以来正教世界の中心に位置するようになったとはいえ、ギリシア正教と呼ばれる東方教会の一構成部分である。ロシアの特徴も備えている。しかし、そのロシア固有の特徴を見極めつつギリシア正教を基本的に把握することは必ずしも不可能ではない。問題は福音主義にとつてギリシア正教とは何か、福音主義の立場からはどの様にギリシア正教に接すればよいのか、ということであろう。従来日本のプロテスタント陣営においてはギリシア正教会、現在無神論体制のもとにあるロシア正教会はほとんど顧みられなかったと言っても過言ではない。福音主義陣営でも同様であった。福音主義神学会は正しい聖書主義に立った福音宣教に努めるとともに、福音主義とは何かを問いつつ、それをいよいよ堅固なものにすべく神学研究に取り組んできた。その際自己の立場を明確にするため自由主義神学を対極とし、カトリシズムの立場をも比較の対象としてきた。ただギリシア正教についてはほとんど視野に入れてこなかった。昨秋の神学研究会議でも「福音と文化」というテーマのもとに他宗教、他教派のことが取り扱われながら、正教のことは触れられていない。それは正教神学、正教史についての研究に本格的に取り組む者がほとんど与えられなかったことによるのであろうが、神学研究というレベルでみると、一つの空白部分となっているのではないだろうか。キリスト教史全体の中で、特に初期の時代には三位一体論の確立などで東方の教会の指導者が果たした役割はそれなりにあり、世界的に正教会も一定の勢力を持っている以上、一概に視野の外に追いやっておくことは不自然なことであろう。福音主義の立場に立って、正教の特徴を十分に捉える必要はあるのではないだろうか。

一九七七年のシカゴ・コールは福音主義キリスト者が慎重な神学的考察を求められる主題を八つに分けて示している。その中で教会史を貫く福音主義的な流れについて、ギリシア正教会、ローマ・カトリシズム内部の刷新運動の一部にも福音主義的衝動があったことを認め、次のように述べている。「われわれは聖書が示している福音の枠を越えようとは思っていない。しかし、われわれは福音の全体的意味に関して、他の時代や、他のもろもろの運動から学びとる必要を認識しないでは、十全な意味で福音主義的であるということとはできない」と。⁽⁵⁾

キリスト教界全体について言えば、カトリック陣営ではかなりの水準で研究されている。キリスト教史、神学的著作でもかなり正教関係のものが邦訳・出版されている。⁽⁶⁾カトリック東方婦一教会という、カトリックと正教会の攻防の過程で生まれた独得の存在形態で、東方正教会の典礼様式をそのまま残すかわりに組織的にはローマ教皇の組織下に入るというものもある（現在のソ連邦ウクライナ共和国では非公認でありながら大きな勢力をもっている⁽⁷⁾）。正教を自陣営の東方の一部と位置づける姿勢があるからか、東方神学に対する研究には一定の関心が払われている。例えばニューヨーク・フォードダム大学にはヨハネ二三世東方キリスト教研究所、ローマにも教皇庁立東方教会研究所がある。⁽⁸⁾日本にも熱心に研究している神父がおられる。一方わが国の正教会自体も最近積極的に正教紹介の出版をするようになってきている。⁽⁹⁾プロテスタント系の出版物では「キリスト教人名辞典」、「世界キリスト教事典」、「日本キリスト教歴史事典」、「教会建築」など事典的なものにおいて正教関係のことが徐々に扱われるようになってきている。しかし福音主義陣営では、「カラー・キリスト教の歴史」（いのちのことば社）である程度公平に扱われているが、残念ながらこれは例外的なものに過ぎず、叙述も十分に分かりやすいとは言えない。しかもそれは欧米の学者達によるものである。それは正教に対する立場、アプローチの仕方がまだ確立されていないからであろう。筆者自身確固たる見解をもっている訳でもなく、正教全体を論ずる能力もないが、ロシア教会史を専攻してきたものとして、⁽¹⁰⁾現在正教会の中心的勢力である、「ロシア」を一つの例にして、多少とも問題提起が出来ればと思うものである。

一、ギリシア正教とは

一〇五四年東西教会は最終的にギリシア正教会とローマ・カトリック教会とに分裂したこと、その主な原因は聖霊発出の問題（いわゆる「フィリリオクエ」問題）、⁽¹¹⁾ローマ教皇の首位説の問題、イコン崇敬をめぐる問題、そして文化的背景の相違からくる習慣上の対立であったことはよく知られているところである。

後に生まれたプロテスタントを加えると（英国教会はこの際は除外する）、①ギリシア正教とカトリック、②カトリックとプロテスタント、③プロテスタントとギリシア正教という三つの関係が生じてくるので、少し整理しておきたい。①における差異で最も重要な論点は聖霊発出の問題であるが、この問題については③でも全く同じ形で見解の相違となる。つまり聖霊発出の問題に関してはカトリックとプロテスタントは同じ立場、即ち西方教会の立場に立つということになる。正教——カトリック・プロテスタントという構図である。次に②で立場が異なる問題の一部は後述する伝承、マリアの問題であろうが、正教とカトリックはよく似た考え方をもっているとみることが出来る。⁽¹²⁾つまりこの点に関しては正教・カトリック——プロテスタントという対立関係が成立する。このようにある意味で関係は入り組んでいるのである。⁽¹³⁾

そうしたことをふまえてギリシア正教の基本的な立場、主張を簡単にまとめておきたい。まず、正教会は使徒時代の教会を最も忠実に守っていると自認するように、伝統を大切にし、「聖伝」の名のもとにそれを信仰の維持にとって欠くべからざるもの、真理を伝えるものとして尊重する。聖書もパラドシス（言伝え＝聖伝）から離れてはあり得

ないとする。十九世紀のロシアの平信徒神学者ホミャコフは言う。聖書を起草したのは教会に他ならない。聖伝を通して聖書に生命を与えるのも教会である。聖書も聖伝ともに聖霊自身のあらわれであり、一つのものである。聖書は書かれた聖伝であり、聖伝は生きた聖書であるといったことである。また、聖伝を通して教会の「神秘的な」生命を表すあらゆる啓示の表現形態——儀式、信経、信仰上の象徴、記号など、聖バシレイオスの言葉によれば隠れた「教理」のすべて——が、キリストのうちにあるもの⁽¹⁴⁾となり、生命を与えられると現代の代表的正教神学者の一人オリヴィエ・クレマンが表現するように、聖なる言伝えは具体的表現形態ともなる。さらにここにマリヤが関係してくる。聖霊によって「言葉」なるキリストを宿したマリヤこそ聖伝の生きた原型だというものである。つまり、マリヤは自分の人間としての本性を、ことばに委ね、聖霊の降臨の恩寵によってはじめて一切のものを神の「生命」で満たすことができ、聖人たちの環の中心にあつて世界創造の目的を実現することが出来たというのである。聖人たちとともにマリヤはその清い生活と神へのとりなしによって聖霊の聖約を創り出すと主張するのである⁽¹⁵⁾。以上のように聖伝はカトリックの「伝承」と同じく神の真理を表すものとして聖書と並べられるのである。しかし、伝統は理念的なものであるとともにまた具体的なものともなったことから、時に人為的な要素が入り込んで教会に混乱を与えることもあった⁽¹⁶⁾。聖伝の根拠としてはヨハネ一四・二六を挙げる。真理の御霊なる聖霊がすべてのことを教え、イエス・キリストが「話しておいたこと」を想起させるとあるように、聖霊の働きの中で使徒たちに教えられ、明らかにされたイエスの申し伝えが真理と信仰の基準を示すものとして大切にされていったということであろうか。このように本来は聖霊の働きのなかでのみ聖伝も生命を持つのである。プロテスタント教会は真理の御霊、慰め主、助け主としての聖霊の働きに大いに依り頼みつつ聖書のみ立つものであるが、正教会においては聖霊の働きによって示されたものと確信したところをある意味で「かたち」にして保持しようとしたと理解することはできないであろうか。いずれにせよカトリックの考え方を含めて十分な神学的考察をすべき分野であろう。使徒的教会と規定する際の重要な論点だからである⁽¹⁷⁾。

聖霊発出の問題に関する正教会の立場は概ね次の通りである。日本ハリストス正教会発行の『正教要理』(一九五二)などによれば、ヨハネ一五・二六のイエス・キリストのことば中の「父から出る」に立って、聖霊は専ら父なる神のみから出るとする。そして正教会が認める最初の七回の全地公会の第二回目に採択されたニカイア・コンスタンティノープル信条には「子とから」の語句はなく、一二七四年のリヨン会議で「フィリオークエ」が入ったものがカトリックにおいて教理化されたことを認めない。東西教会の合同が話し合われたフェララ・フィレンツェ会議中の一四三九年に採択したギリシア人に対する教令でフィリオークエ主義は繰り返され、議論の末東方正教会代表者は安協的態度を示した。しかし、断固それを認めなかったロシアの教会はこれをきっかけにしてコンスタンティノープル総主教から独立していくのである⁽¹⁸⁾。この聖霊発出の問題について、西方教会は同じヨハネ一五・二六でも「私が父のみもとからあなたがたにつかわそうとする」という語句に立って父と子とから来るとするのであるが、プロテスタント教会もその立場をとっている。聖霊の働きに注目したウェスレーもヨハネ一五・二六の注解で、父と子とから出るとする西方教会の伝統的考え方を擁護している⁽¹⁹⁾。

次に神学の方法についてであるが、正教会では一般に「否定神学」と呼ばれる方法を採用している。V・ロツスキに從って簡単に紹介したい。神を体得するためには神に劣るもの、現在あるものすべてを否定せねばならないということに立つ。Apopheaticism というものであり、それに関連するポイントは purification、即ち不純なもの、純粹といえるものを棄て去るという心構えと、被造物の全てに超越する神の住み給う暗闇に入るためにとられる way of ascent である。その原型をシナイ山でのモーセの態度に求める。また、神は本質的には理解し得ないものと規定す

る。そのことを最も端的に示すのは、ダマスコのヨアネスの「神について理解し得ることのすべては、神が無限にして理解し得ないということである」という言葉である⁽²²⁾。しかもあくまでも不可知論は否定し、目標として信仰者の「聖化」、神化」を設定する。そこには、神のエネルギー」という概念が登場してくる。つまり、神はその本質に於ては近ずき難い、知られ得ない方でありながら、ご自身を伝えられるという側面についての概念である。従って、近ずき得ない方に近ずき得るといふ antinomy が生れる。この二律背反を統一性と多様性における三位一体の神秘に似たものと考えようである。エネルギー」とは被造のものではなく、三位一体なる本質から流れ出て、人間を光で充たし、生命を与えるものである。グレゴリオス・パラマースは、神は本質においては近付き得ないが、エネルギーにおいては鏡の中におけるように現前すると説いている。このエネルギーと一般に言う恩寵についての東西教会の考え方には相違がある。正教はエネルギーを本質から永遠に輝き出す自然的本性的発出ととらえ、西方では恩寵の概念が因果関係を暗示するものとされているとして異議を唱えるのである。これは創造論の違いに通ずる。正教は、神は万物をエネルギーにより創造し、その目的として被造物が自由にエネルギーにおいて神との合一に応えること、神の性質に預かるものとなること、永遠に入ることとする。そして神を原因としてではなく、現にあるものとして宇宙に遍在すると捉えるのである。正教にとって、神化、deification という概念は根本的且つ究極的なものである。こうして正教神学は神秘的、默想的傾向をもつことが明らかになる。正教の特徴の一つ静寂主義（ヘシカスム）もこのあたりから生まれてくるのであろう。ちなみに正教会は第一ニカイアから第二ニカイアまでの七回の公会議のみを全地公会と認めている。

二、ロシア正教

ギリシア正教は文字通り、地域的にも文化的にもギリシアを背景にして発展してきたものである。カトリックのように中心地が一所に集中されていたわけではなかったが、ビザンツ帝国の首都でもあったコンスタンティノープルが実際的には中心であったことは否めない。そのコンスタンティノープルは一四五三年異教徒のオスマン・トルコ帝国の前に陥落した。この事件は象徴的なことであって、ロシアが正教世界の盟主をもって自認するようになるのがこの頃であった。そして、後述する「モスクワ第三ローマ」論が登場する。ギリシア正教においては、聖書は宣教先の言語に翻訳され（現在のロシア文字正教にはキリル文字が作られたのも、正教の宣教師がモラヴィアのスラヴ人への伝道する為であった）、典礼も現地語で行うことが容認されていたこととの関係で、それぞれの土地の特徴が加わる要素があった。そういう意味でも徐々に、ロシア正教というものが形成されていった。ここではロシア的なものに焦点を合わせて、歴史、靈性、神学についていくつかの論点を挙げてみたい。

(一) ロシアとキリスト教

スラヴ族のうち東に移動したグループはロシア平原に種族に分かれて定着した。それらをまとめる形でキーエフを中心にした統一国家が形成されたのが九世紀末のことである。スラヴ人には独自の汎神論的世界があり、神々のヒエラルヒーも形成されていた。国家成立後一世紀を経て、中央集権体制の強固な国家となる課題が生じたとき、時の大公は、古代国家によくあるケースだが、土着の信仰体系によってではなく、新しい宗教を導入して国民の意識を統一することでそれを達成しようとしたのである。ロシア版『古事記』ともいうべき年代記『過ぎし歳月の物語』が残さ

れている。後に正教会の僧侶によって編纂されたもの故、いわゆる脚色もあると考えられるが、宗教を外国から導入する様子が興味深く示されている。⁽²³⁾ ユダヤ教、イスラム教、ローマのキリスト教そしてギリシアのキリスト教のどれを選ぶべきかという問題になったとき、大公ウラジーミルは使者を遣わして各々の宗教を研究させ、使者たちの報告に基づいてギリシアつまりビザンツの宗教である東方キリスト教を選ぶという話である。それはビザンツの宗教、教会、礼拝儀式が最も素晴らしいと報告されたからである。これほど単純なことではないにしても、この物語にはロシアが導入しようとした宗教は当時の有力な世界宗教であること、その中からギリシア正教⁽²⁴⁾が選ばれたこと、何故ギリシア正教であったかという問題が提示されている。何故ギリシア正教を選んだのかという問題はロシア史の分野では大きな研究テーマとなっているが、国教として上から国民にこの宗教が強制されたのである。⁽²⁵⁾ このため民間宗教も生き残り、シンクレティズムが見られるとの指摘も多くの研究者からなされている。

東方正教会全体における「ロシア」の位置については、先にも少し触れたように、コンスタンティノープルが陥落した頃を前後に中心となった。そして二五〇年にわたるモンゴル・タタールの支配から脱してモスクワを中心にした強力な国家を形成しようとする時代に、フィロフェイという修道僧が展開した「モスクワ第三ローマ」という理念が登場した。これは(第一の)ローマは既に異教徒の前に滅びた(西ローマ帝国の滅亡のことを指す)、第二のローマであるコンスタンティノープルも滅びた、第三のローマであるモスクワは永遠に滅びることはない、そしてロシアのツァーリ(皇帝)は全キリスト教界のツァーリであるというものである。正教国としてのロシアはその後発展し、徐々にヨーロッパ東部に強大な国家を形成していった。こうして二十世紀の初めまでロシア正教は国の様々な分野で大きな力をもった。しかし、十八世紀初めのピョートル大帝の教会改革により教会は国家権力に従属するものになってから本来の姿を失ったともいわれる。神学校出身者から多くの革命思想家が生まれ、遂には一九一七年のロシア革命を経て、無神論国に組み入れられるという歴史の皮肉を経験することになる。⁽²⁶⁾

こうしてロシアは東方正教の世界で発展してきたわけであるが、同じスラブ族でもポーランド、チェコなどはカトリック教国となった。その関係でそれらの国はルネサンス、宗教改革をも一部経験した。ロシアにはそれらは及ばなかった。その故にこそロシアのキリスト教は古代からのキリスト教をもっとも忠実に伝えると自認する東方正教会の継承者として、独自の世界を保ったといえるのかもしれない。

(二) ロシアの霊性

正教会全体に「静寂主義」という静かに神との交わりを追求する信仰態度が普及している。これは古代キリスト教時代に砂漠に入って神との交わりを追求したエジプトの隠者たちに端を発し、ギリシアのアトス山で最高に発達したものであるが、ロシアでも大いに追求された。ロシアにとっては鬱蒼たる森が、人や社会の助けから完全に離れてただ神にのみ頼り、神を黙想する場としての「砂漠」の役割を果たしていた。修道生活は三つの段階があった。全く一人での隠修生活、二、三人での共住生活、修道院での共同生活である。

ロシアの最初の修道者は、キーエフ近くの洞穴に籠り、一〇六二年キーエヴォ・ペチェルスキ修道院を創設した聖アントニーであった。彼はアトス山で誓願を立て、キーエフに戻って洞穴に籠ったのである。その後洞穴は地下深く掘り進められ、小さな部屋に閉じ籠って神を瞑想する修道者を生み出した。⁽²⁷⁾ これはカッパドキアの岩塊に穴を掘って籠り、そこを自分だけの神との交わりの場とした隠修生活の形態を受け継いだものと言えよう。

修道制はその後急速にロシア全域に広まった。十三世紀のモンゴルの侵入以前にはキーエフだけで十二、ノーヴゴロドには二十、その他の地域に二四の修道院があったという。修道院は文化の中心地でもあり、西方教会では古代の神学的著作の翻訳がまだ殆ど行われていなかった時代に、ロシアの修道院には聖書を始め、としてギリシアの奉信礼

書、ギリシア、ラテン、シリアの教父たちの論文・著作の訳書があった。しかし、モンゴルの侵入により教会、修道院の多くが破壊された。十四世紀にこのモンゴルの支配からの独立と修道制の復活に大きな影響を与える修道者が現れた。ラドネージの聖セールギイである。現在のモスクワの近郊ラドネージで修道生活を始め、謙虚で勤勉な人柄と靈性の故に多くの人をひきつけ、ロシア修道制を復興させた。とともにロシア諸公の内紛を停止させ、モンゴルの支配から放の闘いを励ました人物であった。彼の建てた修道院はキリスト教史上初めて至聖三者（三位一体）に奉獻され、聖の解トロイツェ・セールギイ修道院といい、後にはロシア正教会の本山となった。以後ロシアの修道院は復興・発展していったが、修道院が土地を所有することは是非をめぐり偉大な二人の修道僧が有名な論争を展開した。一般に『所有派』の代表とされるヨシフ・ヴォーロツキイと、非所有派とされるニル・ソールスキイの論争である。修道院は専ら労働と祈りの場であって、土地所有などには関心を示すべきでないとした後者の主張は、修道院は靈的な修道の場であるとともに社会的な事にも一定の関心を持つべきで、その意味では土地所有も是認されるとした前者の主張に敗れた。これにより結果的にロシアの修道院は大土地所有者となる。次第に命を失っていったといわれる。その反動として、ピョートル大帝の教会改革で修道院は大いに力を奪われた。修道院がようやく本来の靈的修道の場として復興するのは十九世紀になってからであり、ホミヤコフ、ドストエフスキイ、トルストイ、ソロヴィヨーフなど多くの文人、思想家に影響を与えたオープンチナ修道院、近代ロシアの最大の『長老』⁽²⁸⁾靈的師父で、ロシア・ヘシユカスムの代表者セラフイームで有名なサーロフ修道院がその主なものである。

ロシアのヘシユカスムということで見逃すことの出来ないものに、イイススのみ名の祈り⁽²⁸⁾と呼ばれる一種の祈りの修行がある。これは東方正教会に古くから伝わる祈りで、「主のみ名を呼ぶものはみな救われる」(使徒二：二一)、「絶え間なく祈れ」(一テサ五：十七)、「どんな時にも聖靈によって祈りなさい」(エペ六：十七)、「いつも目覚めて

祈りなさい」(ルカ十八：一)、「主イイスス・フリストース、ダビデの子よ、罪びとなる私を憐れんで下さい」(ルカ十八：三三)などに由来する。心から神を敬い、純粹に祈るとき、心には静寂(ヘーシユキヤ)が満ちてくる。純粹な祈りの恩寵にあずかるために、絶えず祈る、ことを求めたところから、柔軟でしかも厳しい祈り(オリヴィエ・クレマン)の方法が考え出され、イイススのみ名の祈りとなった。具体的な祈りの言葉は「主イイスス・ハリストス、神の子よ、われら罪びとを憐れみ給え」というもので、繰り返し、繰り返し呼吸のように祈り続けるものである。気持ちを鎮め、統一し、意識がからだの一つとなるよう呼吸を整える。み名を唱えるときの呼吸が聖靈の息吹の一つとなり、心臓の動きとも一致するようにするのである。すると血液の鼓動そのものが祈りとなる。精神は心臓と結び付き、イイススが、あらわれてくる、ようになる。精神からあらゆる不純なものを取り除き、精神を集中させ、常に精神が、目覚めた、状態になっているようにするのである。そして精神を集中するために座った姿勢で視線を体の中央である臍に固定する。そして何千回、何万回と祈り続けるのである。正に生理学と結び付いた祈りの方法であって、十分な指導のもとでの訓練なしには危険が伴うほどのものでもあった。しかし、訓練によってこの祈りをマスターすると、常に独り静寂の中で神に祈り続け、神との交わりの状態になるというものであった。『フィロカリヤ』(美への愛)と呼ばれる祈りと修行のための聖句集がアトス山の修道士聖ニコデモス・ハギオリトとコリントスの主教マカリオスにより一七八二年編集され、パイシイ・ヴェリチコフスキイ(一七二二—一九四)によって教会スラブ語に、ついでロシア語にも翻訳された。⁽²⁹⁾長らく命を失い、信仰の渇きを覚えていたロシア教会は十九世紀になってこの『フィロカリヤ』にみられる静寂主義によって復興し、サーロフの聖セラフイームによって普及していった。この祈りについては正教会の立場からの著作もある。⁽³⁰⁾また、カトリック陣営でも関心がもたれているほか、⁽³¹⁾仏教界でも一部で詳細に研究の対象とされている。⁽³²⁾サーロフの聖セラフイームについてはロシアや欧米で各種の伝記が出

ている。その一つはカトリックの東方正教会研究家古谷功神父によって邦訳されている。³³この靈的指導者の靈性には注目すべき点もあるように思われる。

十九世紀ロシアの靈的運動についてS・ボルシャコフは以下の六つのグループに分けている。①主教職を経て穩修生活に入ったイグナーチイ、フェオフィアンの両主教、②先述したオーブチナ修道院のグループ、③セラフィムを始めとするサーロフ修道院のグループ、④ロースラウリの森の穩修者たち、⑤キーエフのグループ、⑥アトス山のグループである。このうちフェオフィアン主教、聖セラフィム、イイススのみ名の祈り³⁴の生活を生き生きと物語っている『無名の順礼者』(作者不詳、エンデレル書店、一九六七年)について簡単に紹介しておきたい。

フェオフィアン主教は学生生活の後主教になったが、辞して修道院に隱遁し、二八年穩修生活をした。『フィロカリア』のロシアを完成した他、『救いの道』という著作で完徳の道を示している。人間の目標である神との合一に至る道はキリストのおきてに従った信仰と生活である、人はキリストによって贖われ、無償の聖靈の恩恵により救われる、教会は導き手である、苦行によって内面の浄化に達し、キリストに似たものとなる、内面生活には始まり、成長し、完成するという三段階があるとボルシャコフはまとめている。³⁴聖セラフィムについて同じくボルシャコフはこう述べている。キリスト教徒の生活の目標は聖靈の恩恵を獲得すること、それはアダムに与えられたが罪により失われた、キリストの救いにより恩恵は再び返され、洗礼と傳膏(堅信)により受けるが罪を犯すことで失う、失ってしまった恩恵は痛悔、聖体、眞の信仰とキリストのうちに生きること³⁵で回復する、そのとき聖靈の神殿となる、これが聖化の最高のレベルでタボル山でのキリストのように変容する³⁵。『無名の順礼者』ある巡礼者が教会では、絶えず祈れ³⁶とのパウロの言葉を聞き、その道を尋ね、ある修道者から『ドプロトリュービエ』(『フィロカリア』)を読むことを勧められ、イイススの祈り³⁶を実践し始める。それとともに心が光に照らされていく過程、定住して『ド

プロトリュービエ』の研究をした後シベリアに旅立つ話(ここには、イイススの祈り³⁶の実践による完徳の過程が見事に示されている)、自伝という内容になっている。この書はロシア内外に大きな反響を呼び起こしたものである。

プロテスタント教会の歴史において、宗教改革以後正統主義のもとに硬直化した信仰に対し、シュペーナーは主義的信仰を排して、心の宗教³⁷、心情の宗教³⁷を強調し、聖書の研究、再生、聖化、完成の重視、聖靈の働きへの期待を訴えた。このドイツ敬虔主義に続いてツィンツェンドルフのモラヴィア兄弟団は、キリストへの生きた人格的献身の生活を強調するとともに(E・ケアンズ)、世界宣教を手掛けた。そして、十八世紀イギリスの信仰覚醒運動の指導者ウェスレー兄弟はモラヴィア兄弟団の影響を受けて聖靈の働きに期待し、キリストの愛に満たされることによるキリスト者の完徳の希求した。この他にも福音主義との関連で注目すべき運動として宇田進師はピーリタニズム、十九世紀以降の聖靈派の運動、自由教会の運動を挙げておられる。³⁶これらを見ると、今日のキリスト教会、就中プロテスタント福音主義は常に「いま何が欠けているか」という問題意識をもち、神様の前に出続けてきたのであり、今後もそれを継続せねばならないのである。その意味において東方正教会の靈性、ロシアの靈性についても福音主義の立場から分析すべきであろうと思われる。

また、東方正教会では現在欧米の亡命ロシア人神学者、及びその流れを継ぐ学者たちを中心に、新教父神学³⁸と呼ばれる、教父に立ち帰った神学研究が進んでいるが、キリスト教の信仰を固めていくことにおいて活躍した教父たちの見解に、原始教会の姿と共に注目をしなければならぬのではないだろうか。教父の著作集の邦訳が出されたことは注目すべき事であろう。

(三) ロシアの神学

近代のロシア神学について少し触れてみたい。コンスタンティノープル世界総主教が、全正教の柱、光、博士」と呼んだモスクワの府主教フィラレートは、⁽³⁷⁾まず古代教会の教父の教えに光を与え、著作の翻訳を主唱した。そして聖伝について重要な見解を示した。つまり聖伝と学派のさまざまな伝統を区別した。学説のすべてを教義化することに反対し、神学的意見、と教会の決議、を区別したのである。聖伝の中に人為的なものが入り込むことに注意した点で鋭い視点を示したと言えよう。教会論については、その本質は神と人間の崇高な交わりであるとし、教会の原理そのものを最初の人間アダムと三位一体の神の像、多における一の像の中に位置づけた。これは後述するホミヤコフの精神共同体論に道を開くものであった。教会の組織についても注目すべき言葉を残している。一コリ三・十一に立脚して教会の唯一の頭はイエス・キリストであるとし、その上に教会が立てられた岩は、使徒ペテロ自身ではなく、「あなたはキリストである……」という彼の信仰告白であるとしたのである。またフィラレートは東方教会こそ使徒教会の古い伝統の忠実な番人であるとしながら、西方教会をも冷静な態度と愛をもって見た。西方教会は東方教会の参加なしで若干の教義を決定するに当たり、姉妹なる東方協会から分離したけれども、(西方教会も)やはり神から来たものであると柔軟な姿勢をとる。さらにロシア聖書教会の設立に参加し、聖書の近代ロシア語訳を出版している。代表的著作『正教訓蒙』はハリストス正教会の三井神父により既に一八八一年に邦訳されている。

教義神学で最も有名なモスクワの府主教マカリーイのものである。亡命ロシア人神学者エフドキーモフによれば他のものより客観性があり、教父的源泉への復帰がみられるという。シリヴェストル・マレヴァンスキイ主教のものはホミヤコフの影響下で教義的信仰生活を強調し、公会議の決定と神学者たちの言表を忠実に示しており、最もよく利用されている。⁽³⁹⁾文豪トルストイはいわゆる改心後教会教義の研究に取り組み、『教義神学の研究』⁽⁴⁰⁾という膨大な著作を書いて独自の批判的見解を示しているが、その際批判の対象とされた教義神学はマカリーイのものであった。しかし十九世紀になると、ロシアには神学と宗教哲学の間に明確な区分がなかった結果、平信徒神学者が活躍した。独自の神学思想を展開したホミヤコフ、ソロヴィョーフ、フォードロフ、ゴゴリ、トルストイ、ドストエフスキイ、ローザノフ、メレシコフスキイ、フランク、シエストフ、ベルジャーエフなどの宗教哲学者、宗教思想家、文学者であった。

全てを紹介することは出来ないで、一般にはあまり紹介されていないホミヤコフの神学思想についてのみ簡単に触れておきたい。ロシア教会に大きな刺激を与えたからであり、私達にも興味深いからである。教父神学と教会史に精通していたことから、その思想は教父の精神に貫かれている。教会は生命の遺産を使徒たちから受け継いだということに立脚し、教父の論証のみを用いる正教神学を創始したといわれている。教理要綱的な『教会は一つ』にもそれはよく表わされている。P・エフドキーモフによれば、キリスト論的教義は教会に体系や組織的に、体系化された恩恵論⁽⁴¹⁾を示すものではなく、生ける有機体、聖霊の息吹きによって生かされたキリストの体をこそ示すものだとしたのである。その意味で、教会は「一である」というのもそれは一なるキリストと同一視されている。ホミヤコフはこれを、教会はキリスト全体、頭と体であるとしたアウグスティヌス、「人が教会を見つめるならば、真にキリストを見つめることになる」としたニュッサのグレゴリオスに求めているという。教会についてはさらに外的権威としてでなく、本質的に満ち溢れる泉、恵みに加わる恵み、自由に加わる自由(エフドキーモフ)を与えるものとして捉える。信仰の領域では、あらゆる強制された結合、あらゆる形式的な服従は真の関係を損なうとして、あくまでも神はキリストにある人々にとっては自由であるとの立場をとった。しかしこの自由について、カトリックは「自由のない統一」に陥り、信徒に服従を強いていると見なし、プロテスタントは「統一のない自由」となり、主観的信仰に陥っ

していると批判する。かくて服従と主観的信仰を超えて真の教会の態度を示すものは正教会における奉信礼であると主張した。つまり、同じ霊の統一に於て、父、み子、聖霊を公言するため互いに愛し合う、場として奉信礼を捉えたのである。こうしてホミヤコフは最も有名な「精神共同体」(ソポールノスチ)という概念に到達したのである。教会には神を愛し、互いに愛し合うことに基づく個人の自由な結合があるというものである。ホミヤコフはパスカル、J・A・メーラーなどの影響を受け、西欧哲学の合理主義、ドイツ観念論を批判して、愛と自由の交わりとしての教会に光をあてたのである。興味深い視点であろうと思われる。この思想は正教会の伝統的な教会論にとっては受け入れ難い面もあったが、その後も正教思想家に大きな影響を与えた。⁽⁴³⁾

作家が神学者の列に加えられるのもロシアの特徴の一つであろうか。ドストエフスキイは革命思想から流刑先で深く聖書を読んで宗教的思想家となったが、文学作品を通して神、人間、罪、愛などの問題を深く追求し、また人類の問題を提起した。聖書的、キリスト教的テーマを人間、社会において内面的に掘り下げたのであった。正教のテーマを文学を通して提示した。⁽⁴³⁾ 一方、同じく神の問題を生涯追求し続けたトルストイは全く別の手法をとった。苦闘の末到達したキリスト教信仰もトルストイにとっては信仰に裏づけられた「生活」を伴うものでなければならなかった。そこで、土にまみれ素朴に信じ、感謝して生きる農民たちの信仰にこそ自らの改心の足場を見いだしたのであった。また、信仰の内容を人間の理性の光に照らして点検し、理性に反するところは大胆に削り取っていった。新約聖書に對しても大なたを振り、いわゆる「山上の説教」の箇所を最も重視し、パウロの書簡を軽視した(一方ヤコブの手紙はこれを愛した)。異端的なグループに對しては寛容であった。トルストイはこうした立場に立って、人生論に筆をふるった。人間の生き方をいわば外側から追求しようとしたのであった。人間を「外側」から追求したトルストイと、「内側」から掘り下げたドストエフスキイとは好対象であったが、世界的文豪の内にはいわば機能が分担されていたの

も興味深いところであろう。独自の思想はあっても(人間の理性に立って信仰内容を大幅に限定したトルストイの立場は問題だが)、両者はロシア正教という枠組みの中にあつた。そして霊的指導者である「長老」にみられる二つの側面を分担して受け止めたように見える。一方は東方キリスト教の精神性である神秘思想と靈性を、他方は「ヘシユカスム」の伝統に立つ謙虚な、人に仕える姿勢に注目したのではないか。こうして二人はロシアの靈性を文学を通して提示したといえる。そして人類的なテーマとして普遍化したのであり、それはキリスト教思想の一つとして人類の共通財産と受けとめることができよう。独得のユーモアをもって読者を魅了するゴーゴリも文学活動の外に宗教的著述を行ったことはあまり知られていない。しかし、正教のリトウルギヤ(リタージヤ)について立派な著作を残している。

哲学者ベルジャーエフ、ソロヴィヨフ、シェストフについてはその著作が邦訳されているので参照されたい。⁽⁴⁴⁾

最後に、革命を契機に成立した「亡命神学」というべきものを紹介しておきたい。革命を嫌って亡命した神学者、哲学者が展開した神学のことであるが、その中心はパリとニューヨークであった。パリには聖セルギイ神学院があり、現代の代表的正教神学者が活躍してきた。N・ベルジャーエフ、神知学のS・ブルガコフ、哲学のB・ゼンコフスキイ、新教父神学を展開するG・フロロフスキイ、教義学のV・ロフスキイ、⁽⁴⁵⁾ 教会史家のA・カルタシヨフ、学院長を務めた新約聖書のK・ベズブラゾフ主教、教会法のN・アフナーシェフ、先に紹介したP・エフドキモフらがいる。ニューヨークには聖ウラジーミル正教神学院があり、四〇〇万人以上の信徒がいるといわれるアメリカの正教会の神学研究のセンターとなっている。N・ロフスキイ、G・フロロフスキイ、J・メイエンドルフ、A・シユーマンらの神学者がここで教鞭をとった。多くの宗教思想家が革命後亡命したが、現在のソビエトにも神学校はモスクワ、レニングラード、オデッサにあり、神学研究、神学教育がなされている。

おわりに

千年祭を迎えたロシア正教の世界を見、ロシアの靈性にも触れることを通してギリシア正教の特色に近づこうと試みた。そして、静寂主義が大きな特徴の一つであることが明らかになった。しかもそれを追求する者は、神秘家、到達した思想は、神秘思想と呼ばれる。確かにそこには神との合一、聖化、神化を求める献身の姿がみられるが、それは主として穩修という形をとっている。穩修生活というのは誰もが出来るものではない。彼らの靈性は一般の人に影響を与えたことも疑い得ないことであるが、その靈性がどこまで浸透したかが最も重要なことであろう。その点、イイススの祈りについては指導を必要としながら、一般にも普及する要素があった。十九世紀は靈性復活の時代であったといわれるが、社会全体としてはやがて革命を迎えなければならないほど、ある意味で腐敗していたとも言えるのである。靈性という問題はさまざまな意味において慎重に検討を加えるべき問題であろう。

この他、一九六四年の歴史的なローマ教皇とコンスタンティノープル総主教との会見以来東西教会の対話は神学を含めて徐々に拡大してきているということ、大半が社会主義国の中で存在している正教会に対する関心と祈りの問題などは興味深い問題、或いは私たちの課題ともなる。

私達は福音主義の立場を堅持しつつ、常に欠けているものはないかという問題意識を持ち続けなければならない。そのレベルで正教会の神学、特に神化の神学などに検討を加えることもあながち無意味ではないであろう。

- (1) 千年祭を記念して本山がモスクワ近郊ザゴルスクの聖トロイツェ・セルギイ大寺院からモスクワ市内の聖ダニール修道院(モスクワの初代の公で、後に剃髪した聖ダニールが建てた十三世紀の修道院が母体)に移されたことも大きな事業である。
- (2) ソビエトにおいて教会は公認と非公認の形で存在するが、その差は国家の管理、監督に従うか、従わない(従えない)かであり、それによって後者は弾圧の対象となる。その意味で国家と何らかの妥協がなければ公認の存在とはなり得ないのであり、そのような存在形態は認め難いという立場がある。確かにそういう観点もあろうが、ともかくも教会として活動を続けているというところもつ、存在感にも冷静な分析を加えるべきではないかとも思われる。
- (3) ニコライの日本宣教及び日本における正教の働きについては以下の邦文献がある。柴山準行『大主教ニコライ師事蹟』(日本ハリストス正教会総務局、一九三六年)、牛丸康夫『明治文化とニコライ』(教文館、一九六九年)、ニコライ『ニコライの見た幕末日本』(講談社、一九七九年)、川又一英『われら生涯の決意——大主教ニコライと山下りん』(新潮社、一九八一年)、牛丸康夫『日本正教史』(日本ハリストス正教会教団府主教庁、一九七八年)、ボズニエーフ『明治日本とニコライ大主教』(講談社、一九八六年)など。
- (4) カップドキア派教父である聖大バシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオスなどの主張は第一コンスタンティノープル公会議(三二一年)で正統とされた。ネストリオス派とキリスト単性論が退けられた第三コンスタンティノール公会議(六八〇年)では、表信者マクシモスの活躍があった。この他に正教会がしばしば引用する教父は、聖イレネウス、シリアの聖エフライム、アレクサンドリアの聖アタナシオス、アレクサンドリアの聖キュリロス、聖マカリオス、聖ヨアンネス・クリュノストモス、ダマスコの聖ヨアンネス、聖ヨアンネス・カッシアヌス、聖ヨアンネス・クリマコス、新神学者シュメオンなどである。
- (5) 宇田進『福音主義とは何か』(いのちのことば社、一九八四年)二一五—一六頁。
- (6) ジョージ・A・マローニ『沈黙への旅』(あかし書房、一九八〇年)、同『キリスト』(あかし書房、一九八一年)、同『神のいぶき』(あかし書房、一九八七年)、同『東方キリスト教神学入門』(新世社、一九八八年)、古谷功『イコン——神秘の美——』(あかし書房)など。

- (7) 参照、拙稿「ソビエトにおける宗教の実態」中京大学社会科学研究所紀要『社会科学研究』第七卷第二号(一九八七年)、『世界キリスト教百科事典』(教文館、一九八六年)。
- (8) カトリックの東方教会研究の第一人者であるイエズス会士ジョージ・A・マローニ(一九二四—)は、ローマの教皇庁立研究所で学位を取り、ニューヨークのヨハネ二三世東方キリスト教研究所の創設者に尽力した。近年マローニ師の著作は多くが邦訳されている。
- (9) 牛丸康夫「ニコライと明治文化」、同『日本正教史』、高橋保行「日曜日」(南窓社、一九七八年)、同『ギリシア正教』(講談社、一九八〇年)、同『イコンのこころ』(春秋社、一九八一年)、高井寿雄『ギリシア正教入門』(教文館、一九七八年)など。日本ハリストス正教会は本部で『正教時報』等を各教区も各種の小誌を出している。大阪の牛丸康夫長司祭も『曙光』という総合文化誌などを通し啓蒙活動を積極的に進めておられたが、一九八六年突如永眠され、多くが廃刊となってしまったのは残念である。
- (10) 継続的に取り組んでいるテーマは、十七世紀中葉の「ニコンの改革」と呼ばれる、総主教ニコンによって断行された教会文書、儀式(儀礼)の改革、それによって生み出された分離派(それまでのロシアに定着していた伝統に依拠したグループで古儀式派という)の立場、歴史であり、論文・研究発表を行ってきた。参照、拙稿「ニコンの教会改革とラスコール」(中京大学教養論叢)第十五卷第二号(一九七四年)、『ラスコリニキをめぐる若干の問題』同第十六卷第一号(一九七五年)、『初代ラスコリニキにおける反キリスト論』(一)(二)同第二十五卷第一号、第三号(一九八四年)、『ラスコリニキの内部分化』(一)同第二十卷第二号(一九七九年)、『ラスコール研究文献紹介』『ロシア語ロシア文学研究』第十二号(一九八〇年)他。
- (11) 文化的背景の相違からくる問題は表面的なものであるが、髭の有無(正教会の聖職者は鬚をたくわえる習慣があり、今も続いている)、齋(精進)の問題でいつも対立していた。
- (12) 正教会では外典のことを不入典書という(主教ワシリー「正教要理」)。カトリックの第二正典とは若干食い違っている。正教会ではマリアのことを生神女マリアという。正教の十二大祭でマリア関係のものは、生神女誕生祭、生神女進堂祭、生神女福音祭、生神女就寝祭がある。
- (13) 中世のロシアにおいては、カトリックは極度に嫌われた(プロテスタントは西欧文化の紹介者として受け入れられていた)。反動宗教改革運動の一環としてイエズス会によりロシアのカトリック化が目指され、ロシアは脅威を感じていたこともある。正教防衛のために正教神学の研究がウクライナで発展したが、ウクライナは一時ポーランド領となっていたこともあり、カトリック神学の手法が採用されたのは皮肉であった。
- (14) オリヴィエ・クレマン『東方正教会』(白水社、一九七七年)一一五頁。
- (15) 前掲書 一一五—一一六頁。
- (16) 正教学者 T. Ware はいわゆる聖伝とその他の習慣化が伝統になったものとは区別すべきであり、ロシア教会に十七世紀に起きたシスマで古儀式派と呼ばれる分離派は十字を切る指の組み方、ハレルヤを唱える回数などで、伝統について誤った判断に陥ったと指摘している。参照、拙稿「正教における『聖伝』について」(中京大学教養論叢)第十九卷第三号(一九七八年)。
- (17) オリヴィエ・クレマン『東方正教会』九頁。参照、S・ブルガーコフ「聖伝としての教会一、二、三」『正教時報』号数不明。
- (18) 『カトリック教会文書資料集』(エンデルレ書店、一九七四年)一九八頁。
- (19) 前掲書 二四二—三頁。
- (20) 森安達也『キリスト教史三』(山川出版社、一九七八年)三三四頁、三四三—七頁。
- (21) L・M・スターキー『ウェスレーの聖霊の神学』(新教出版社、一九八五年)第二章。カトリックの要理解説書『キリストとその教会』(中央出版社、一九八八年)の中で百瀬文晃師は現在カトリック教会が認めているニカイア・コンスタンティノープル信条について、元は「父よりいで」となっていたのを後に西方教会が「父と子よりいで」と修正したと注目すべき解説を行っている。
- (22) Vladimir Lossky, *The Mystical Theology of the Eastern Church* (London: James Clarke & CO. LTD, 1957.) p. 36.
- (23) 参照『ロシア原初年代記』(名古屋大学出版会、一九八八年)。
- (24) ロシアのキリスト教受容は十世紀末で、東西教会が最終的に分裂する前であったので、厳密にはギリシア正教とは呼べないのであるが、実質的にはギリシア正教であった。
- (25) 『ロシア原初年代記』六四九六年の項。
- (26) ヘルジャールエフはこうしたロシアの運命について独自の見解を示している。参照『ロシア共産主義の歴史と意味』(ヘルジャールエフ著作集)第七巻、白水社)。
- (27) 筆者はかつてそこを訪れたことがある。狭い通路の両側には、鉄の扉が鍵でしっかりとめられ、食べ物は壁に開けられた小

- さな穴から差入れてもらう小部屋があった。また、今も修道者のミイラが多数残されていた。
- (28) ロシア語ではイエスを *Иисус* (Iesus) と綴っている。十七世紀のニーコンの教会改革は、それまでの綴り方 *Исус* (Isus) を修正したのである。古い綴り方はロシアの伝統によるものとして退けられたのである。
- (29) 教会スラヴ語版『ドブロットリュービエ』初版は一七九三年モスクワで出版され、一八二二年に第二版、一八三二年第三版が出版されている。ロシア語への翻訳は穩修士フェオフィーン主教によりなされた(一八七六―九〇年)。
- (30) アメリカの正教学者ジャン・メイエンドルフの『聖グレゴリオス・パラマス』(中央出版社、一九八六年)がある。
- (31) セル・パスツール『イエススの祈り』(あかし書房、一九七八年)が厳律シトー会士高橋正行神父により邦訳されている。高橋師によれば、「東方の霊性と修道制の生命」のシリーズとしてフランスでベル・シゲル『イエススの祈り』(パリ、ソウイル社、一九四八年)などが出されているという。
- (32) 清水澄「ロシア・ヘシカスム管窺」『法然浄土教の総合研究』同「G・パラマスの光明についての管見」伊藤真城、田中順照 両教授頌徳記念『仏教学論文集』(東方出版、一九七五年)など。
- (33) イリナ・ゴライノフ『サローフの聖セラフイム』(あかし書房、一九八五年)。この他にも V. Zander, *Seraphim of Sarov* (New York: Vladimir Seminary Press, 1975) などもある。
- (34) S・ホルシヤコフ『ロシアの神秘家たち』(あかし書房、一九八五年)三九頁。
- (35) 前掲書 四二頁。
- (36) 宇田 進『福音主義とは何か』第一章。
- (37) ロシアでは十八世紀のピョートル大帝の教会改革以来一九一七年の革命前夜まで総主教制は廃止されており、府主教(複数)は最高位にあった。
- (38) P・エフドキーモフ『ロシア思想におけるキリスト』(あかし書房、一九八三年)一一四頁。
- (39) 前掲書 一一五頁。
- (40) 『トルストイ全集』(河出書房新社)第十四巻。
- (41) P・エフドキーモフ『ロシア思想におけるキリスト』一一三頁。
- (42) George A. Maloney, *A History of Orthodox Theology since 1453* Belmont: Nordland Hous Publisher.) P. 61.
- (43) ハリストス正教会の高橋保行神父は『カラマゾフの兄弟』について、それはキリスト教思想の中心問題に触れ、的確にギリシア正教の思想を代弁しているとみなしておられる。この作品の冒頭の聖句ヨハネ十二・二四こそ人が改心して蘇り、キリストの姿をとるといふプロセスを明らかにしており、そのプロセスはキリストによって始められた、ギリシア正教思想の基本概念であるとも言われる。また、それは人間の神化とよばれるものであると高く評価しておられる(『ギリシア正教』二三三頁)。
- (44) 『バルジャエフ著作集』(白水社、全八巻)、『ソロヴィヨフ著作集』(全六巻、別巻二、刀水書房)、『シエストフ選書』(全十二巻、雄渾社)。
- (45) 最近、宮本久雄氏の訳で『キリスト教東方の神秘思想』(頸草書房、一九八七年)が出されている。
(単立清和キリスト教会責任役員、中京大学教授)